

< 今日の説教のポイント ルカによる福音書 12 章 35～48 節 >

## 1 続いた医師殺害事件に思う 「死んでお終い」にはならない。

最近続けて起こった医師殺害事件の加害者たちは、死んだらどうなると思っているのでしょうか。「死んだらそれで何もかもお終い」と思っていたのでしょうか。私たちキリスト者はそうは思いません。なぜか？聖書は、そしてイエス様は、終わりの日のこと、神の国のこと、再臨のこと、主人が帰って来て開いて下さる宴のことを繰り返し語り教えているからです。日頃はあまり考えないことですが、このような事件が起きますと、これらの教えの大切さを思わされます。聞きましょう。

## 2 (12:13-34) 直前の個所に注目 すでに語り始められていた内容。

実は既に今日の個所の前、「愚かな金持ちの例え話」(12:13-21)と「思い悩むなの教え」(12:22-34)の所で、イエス様は「この世のことだけでなく、来るべき神の国のことを思って生きよ」と教えられていたのです(20-21, 31-33)。これらの教えを聞いてから今日の個所を読むと、「今この時を主人の帰宅に備えて目を覚まして生きよ」と言われていることに納得がいきます。

## 3 目を覚まして主人を迎えた者に与えられる法外な褒美に注目。

例え話は、その例えで言いたいことは何かを思い間違ふと訳が分からなくなります。今日の話では、主人の帰宅時間の気ままさが主題ではなく、主人のいないことをいいことに僕が勝手気ままに生きる姿が問題とされているのです。同時に、主人への感謝の思いを持って生きた僕への法外な褒美、すなわち、全財産の管理や主人が給仕する宴への招待の話は、私たちにこの世で主のためにいかなる艱難を受けようとも、それでも主の教えに従う生き方をし通そうという思いを与えてくれるのではないのでしょうか。パスカルはパンセの中で、「神を信じないで生きるのと信じて生きるのとではどちらがいいか、その答えは明らかだ、後者だ」と語っています。面白い言い方ですが、今回の事件などを見るとその通りだなと思わされます。キリスト教信仰とは、私の生きたい生き方を支えてくれるものではなく(その程度のものであるときに、45 節のようなことが起きる)、キリストが示された生き方を私の生き方にしようとすることであり、それ故に何があっても揺るがない土台となるものなのです。分からないでなお罪犯す私たちですが、少しの鞭打ちで気づかせて下さる神様に感謝して歩み続ける者でありたいと思います(47-48)。